私家傳蕎麥飯の義は、嘘八百年來一子相傳にして、粟の飯五十年の夢ぐらゐのことにあらず、先づ飯椀の蓋をとれば、露をふくめる月の如く、口に入ては、あわ雪の解るに似たり、

〔我衣〕美濃部は、肝癖の症ありて、短氣の人なり、何か同役衆中參會して酒宴の折柄、飯椀の大きなるに、波々と酒をつぎて、下田氏持來り、美濃部に頻りに進む、○略下

〔醒睡笑五〕姥

一朝食のうへに、初獻にはかさにてとをし、二返には中の椀、三返には汁のわんにてもらせけり、四返めには、はなやかに飯のわんにてつがせんと、たくみすまひて、銚子を先に出し、跡よりていしゆ出て、時宜をいはんとおもふ間に、とくはや飯のわんにて、こぼるゝばかりうけたれば、亭主いはん事なきまゝ、さてかよひ盆でよう御座らふ物を、

〔玉露叢十〕一寛永十二年正月廿八日ニ、二ノ丸ニ於テ、將軍家家光公ヘ仙臺ノ政宗御膳ヲ上ラル、○中略公方樣○中略猶亦御膳召上ラレヤウ、御汁ノ椀ニテモ、亦御カサニテモ、扨ハ御皿ニテ成トモ、御手ニカヽリタル器ニテ御食入サセラレ召上ラレ候、中々ニ取揃ヘテハ召上ラルヽコトニハナク候、

〔好色五人女一〕狀箱は宿に置て來た男

船頭聲高に、さあ〳〵出します、銘々の心祝なれば、住吉さまへのお初尾とて玄やく振て、又あたま數よみて、呑ものまぬも七文づゝの集錢出し、間鍋もなくて、小桶に汁椀入て、飛魚のむしり肴、取いそぎて三盃機嫌、おの〳〵のお仕合、此風眞艫で御座ると、○略下

〔浮世親仁形氣一〕食を樂む達者親父

身共も若い時は、三升の食に疵は付ませなんだが、無念にござるは年の加減で、此頃は汁椀に一盃程はたべ殘しますと、喰自慢を高聲にはなさるゝ、